

## 一

次の文章を読み、後の問い（問1～11）に答えよ。（配点 50）

ちようちよう 作詞 野村秋足

ちようちよう ちようちよう

なのはにとまれ

なのはにあいたら さくらにとまれ

さくらの花の 花から花へ

とまれよ あそべ あそべよ とまれ

どうして菜の花ではなく、菜の葉なのか？

ちようちよう ちようちよう 菜の葉にとまれ

菜の葉にア<sup>a</sup>いたら桜にとまれ

この歌を聞くと、誰もがチヨウチヨウが飛びカウ<sup>b</sup>黄色い菜の花の畑を思い浮かべるのではないだろうか。

しかし、よくよく考えてみるとこの歌詞はどこか奇妙である。

この歌には「菜の花」という言葉は登場しない。登場するのは「菜の葉」なのである。

チヨウが花から花へ、というのであれば、イメージに合うが、どうして菜の花ではなく、菜の葉なのだろうか。

童謡に歌われているモンシロチヨウを観察してみると、実際に菜の葉によくとまる。モンシロチヨウの幼虫である青虫は、アブラナやキャベツなどアブラナ科の植物を食べる。そのためモンシロチヨウは、アブラナ科の植物に卵を産みつけるのである。

チヨウが菜の葉にとまるのは、葉に卵を産みつけるためである。

しかし、産卵のために菜の葉にとまったチヨウが、その後、菜の花ではなく、わざわざサクラの花まで飛んで行って蜜を吸いに行ったりするのはなぜだろうか。

### 原詩に隠された謎

「ちようちよう」はスペイン民謡のメロディに国文学者の野村秋足が詞をつけたものだが、この歌はもともと尾張地方のわらべ唄だったと言われている。

わらべ唄の歌詞はこうである。

蝶々<sup>ちようちよう</sup>とまれ

菜の葉にとまれ、

菜の葉がいやなら

この葉にとまれ

じつは原詩では、チョウは花から花ではなく葉から葉へと飛び回っていたのである。

ところが、この歌詞に野村秋足は日本の春のシンボルであるサクラを読み込んだ。ただし、最初に作った歌詞は「桜の花の 栄さかゆる御代みよへ」と日本を称たえるものであったか、戦後、

ア

する意図から「桜の花の 花から花へ」に改訂された。

そして、葉から葉へと飛び回っていたはずのチョウが、時代を経て花から花へ飛び回るように書き換えられてしまったのである。

ただ、もともとの歌詞の

X

な部分である「菜の葉」は残されたのである。

チョウが菜の葉を飛び回る理由

しかし疑問は残る。

チョウが花から花へと飛び回るのはわかるが、葉から葉へ飛び回ることなどあるのだろうか。それに、菜の葉に卵を産むはずのモンシロチョウが「菜の葉がいやなら この葉に止まれ」とはどういう意味なのだろうか。

モンシロチョウの幼虫である青虫はアブラナ科の植物しか食べない。そこでモンシロチョウは、幼虫がロトウに迷うことのないように、足の先端でアブラナ科から出る物質を確認し、幼虫が食べることができ植物かどうかを判断する機能をもっているのである。この行動はドラミングと呼ばれる。そのため産卵をするモンシロチョウは、次から次へと葉っぱに止まっては、足でさわって確かめながら、アブラナ科の植物を求めて、葉から葉へとひらひらと飛び回るのである。

しかし、こうして目的の菜の葉にたどりついても終わりではない。一カ所にすべての卵を産んでしまうと、幼虫の数が多すぎて餌の葉っぱが足りなくなってしまう。そのためモンシロチョウは、葉の裏に小さな卵を一粒だけ産みつける。そして、次の卵を産むために新たな葉を求めて、葉から葉へと飛び回るのである。

A  
まさに「ちょうちょう」の原型となったわらべ唄の歌詞のとおりである。

チョウと菜の花のライバル関係

それにしても、どうしてモンシロチョウの幼虫は、親にこんなに苦勞をかけてまで、アブラナ科の植物しか食べないのだろうか。何という極端な偏食だろうか。えり好みせず、いろいろな植物を食べたほうが、もっと生存の場所も広がるし、何より親のチョウだって卵を産むのがずっと楽ではないだろうか。

もちろん、青虫だってほかの葉っぱを食べられるものなら、そうしたいだろう。しかし、そうも  
B  
いかない理由がある。

植物にとって、オウセイdな食欲で葉をむさぼり食う昆虫は大敵である。そのため、多くの植物が昆虫の食害を防ぐためにさまざまなキヒ物質eや毒物質を体内に用意して、昆虫に対する防御策をとっているのである。

一方の昆虫にしてみれば、葉っぱを食べなければガシfしてしまう。そこで、毒性物質を分解して、無毒化するなどの対策を講じて、植物の防御策を打ち破る方法を発達させているのだ。ところが、植物の毒性物質は種類によって違うから、どんな植物の毒性物質をも打ち破る万能な策というのは

難しい。そこで、ターゲットを定めて、対象となる植物の防御策を破る方法を身につけるのである。一方、植物も負けていられないから、防御策を破った敵となる昆虫を防ぐための防御物質を作り出す。すると昆虫もさらにその防御物質を打ち破る方法を身につける。

こうなると一対一の、意地の張り合いのようなものだ。さりとて、植物も昆虫も自分の生存がかかっているから、どちらも負けるわけにはいかない。この両者の<sup>g</sup>グンカク競争によって特殊な防御物質を作り出す植物と、その防御策を打ち破ることができる昆虫というライバル関係の組み合わせが作られるのである。特定の種類の植物しか食べない狭食性の昆虫が多いのはそういうわけなのだ。こうして、モンシロチョウとアブラナ科植物とは Y として、共に進化を遂げてきたのである。もはやモンシロチョウの幼虫は、好むと好まざるとにかかわらず、アブラナ科植物を食べつづけるしかない。こうなると、もう切っても切れない密接な間柄である。

甲

アブラナ科植物の防御物質はカラシ油配糖体と言われ、たとえばワサビやカラシナの辛味の元になるのもシニグリンと呼ばれるカラシ油配糖体である。私たちが好んで食べるアブラナ科野菜独特の辛味も、本来は昆虫に対する防御物質なのだ。

しかし、モンシロチョウの幼虫である青虫は、すでにアブラナ科植物の防御物質を打ち破る術<sup>すべ</sup>を身につけている。だから青虫はカラシ油配糖体を含んでいる葉っぱしか食べない。カラシ油配糖体を持たないアブラナ科以外の植物を食べてもよさそうな気がするが、他の植物は、カラシ油配糖体以外の毒性物質を持っている可能性が高いので、むしろ危険である。

さらに、モンシロチョウはカラシ油配糖体に対する対策を準備するばかりでなく、それをうまく利用している。

葉から葉へと飛び回るモンシロチョウは足の先でアブラナ科植物のカラシ油配糖体を探しながら、産卵する植物を決めているのである。昆虫を追い払うはずの物質が、I モンシロチョウを呼ぶ目印になってしまっているのだ。昆虫の食害を防ぐためにと、II 防御物質を作り出したのに、モンシロチョウには III 利用されている。菜の花にとっては、IV やりきれない話だ。

歌のとおり、さっさとサクラの花にでも遊びにいったらほしいと、菜の葉は切に願っていることだろう。

「菜の葉」にとって、チョウは招かれざる客であるが、「菜の花」にとってはどうだろう。

植物の花が美しい花びらで花を飾り、甘い蜜を用意するのは、昆虫を呼び寄せるためである。そして、呼び寄せた昆虫に花粉をつけさせて、ほかの花に運んでもらうことによって、植物は受粉をし、種を残すことができるのである。

そう考えると、菜の花にとってチョウは、<sup>c</sup>利用価値のある昆虫なのではないだろうか。

ところが、残念なことに、チョウは菜の花にとっても招かれざる客のようである。

人間にとっては「蝶よ花よ」というくらい、チョウは好まれる昆虫であるが、植物にとってはそうではない。ハチやアブなどの昆虫は、花の中にもぐりこんだり、花の上を歩き回ったりして蜜を吸うので、体中に花粉が付着する。これに対して、チョウは長い足を持ち、長いストローを伸ばし

て花から蜜を吸う。そのため体に花粉をつけることなく、チョウは蜜を吸うことができるのである。花がたつぷりの蜜を用意するのは、蜜を与える代わりに、花粉を運んでもらうという持ちつ持たれつギブアンドテイクの関係を期待しているからである。花粉を運ぶことなく、蜜だけを吸ってしまふモンシロチョウは、菜の花にとっては蜜どろぼうに過ぎないのである。

### チョウに花粉を運ばせる花

ところが、そんな蜜どろぼうのチョウに花粉を運ばせる花もある。

チョウの中でも大型のアゲハチョウは、体が大きく飛翔距離が大きい。チョウに花粉を運ばせることができれば、大量の花粉を遠くまで運ぶことが可能になるのである。

赤信号が遠くでも目立つように、赤い光は波長が長く、もっとも遠くまで届く色であることから、遠い距離から花を訪れるアゲハチョウの仲間には、赤系統の色を認識しやすい。そのためチョウをパートナーに選んだ花たちは、赤色や橙だいだい色だいだいをしている。

例をあげると、ユリヤツツジなどは、アゲハチョウの仲間に花粉を運んでもらう花である。そのため、ユリヤツツジの花は、大きなアゲハチョウに見合うような、大きな花びらをつけた立派な花を咲かせて、アゲハチョウを惹ひきつけるために、豊富な蜜と強い香りを用意するのである。そのため、ユリヤツツジの花には、人間が舐なめても甘いくらい大量の蜜がある。

しかし、チョウを呼び寄せたとしても、そこDからが大変である。何しろチョウは長い足とストローのような長い口で蜜を吸う蜜どろぼうなのだ。

そこで、ユリヤツツジはおしべやめしべを、これでもかとはかりに前に突き出して、チョウの体に花粉をつけようとしているのである。

しかも、ユリヤツツジなどチョウに花粉を運ばせる花は、横向きや下向きに咲いている。これはチョウにとっては何とも吸いにくい。チョウはどうかして蜜を吸おうと必死に羽をばたつかせる。そうしているうちに知らず知らず体に花粉がついてしまうのである。

### 紋が黒いのにはモンシロチョウ

春の陽ひだまりをゆらゆらとモンシロチョウの飛ぶ風景は春の Z であるが、よくよく考えてみると「モンシロチョウ」という名前には不思議なことがある。

モンシロチョウは漢字で紋白蝶と書く。しかし、「紋白」とは言うものの、モンシロチョウは白いのには紋ではなく羽である。紋は黒いのに、どうして紋白蝶と言うのだろうか。

モンシロチョウはもともと、黒い紋のある白いチョウなので、紋黒白蝶（モンクロシロチョウ）と呼ばれていた。ところが、この名前ではどうにもややこしいので略して紋白蝶と呼ばれるようになったのである。紋の色だけ見ると正確には「紋黒蝶」のほうが正しいようにも思えるが、それでは黒いチョウのように聞こえてしまう。じつは、「紋白蝶」は紋のある白い蝶という意味なのである。

紋白蝶に対して、同じシロチョウ科のチョウには紋黄蝶（モンキチョウ）もいる。これも紋のある黄いろい蝶という意味である。

モンキチョウはモンシロチョウによく似ているが、羽の色が黄色いのが特徴で、また、モンシロ

チョウの幼虫がアブラナ科の植物を餌にするのに対して、モンキチョウの幼虫はマメ科の植物を餌にしている。

チョウの美しい色や模様は、羽についた鱗粉りんぷんによるものである。鱗粉を取ってしまうと、モンシロチョウもモンキチョウも、トンボやハチと同じように透明の羽になってしまう。この鱗粉には、水をはじいて羽を保護する役割がある。

美しい鱗粉は、じつは、さなぎのときに外に排出できない老廃物を再利用して作られる。モンキチョウのようにチョウの羽に黄いろい色が多いのは、老廃物の中の尿酸によるものなのだ。そういえば、モンシロチョウの羽の色も完全な白色ではなく、羽の裏側は少し黄色みがかっている。

モンキチョウやモンシロチョウの羽の黄色は、何とも春めいて見えるが、鮮やかなその羽の色の理由は、子どもたちには秘密Eにしておいたほうが、よさそうである。

稲垣栄洋「赤とんぼはなぜ竿の先にとまるのか？」（東京堂出版 2011年）

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～g のカタカナを漢字に直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は  ～  。

a	ア	<input type="text" value="1"/>
b	カ	<input type="text" value="2"/>
c	ロトウ	<input type="text" value="3"/>
d	オウセイ	<input type="text" value="4"/>
e	キヒ	<input type="text" value="5"/>
f	ガシ	<input type="text" value="6"/>
g	ゲンカク	<input type="text" value="7"/>

問2

空欄

X

Z

それぞれ一つ選べ。解答番号は 8 に入る語として最も適当なものを、次の①～⑨のうちから

X

① 夢想的

② 本質的

③ 普遍的

④ 観念的

⑤ 形式的

⑥ 叙情的

⑦ 抽象的

⑧ 象徴的

⑨ 寓意的

8

Y

① 作業員

② 共犯者

③ 救世主

④ 大食漢

⑤ 策略家

⑥ 好敵手

⑦ 叛逆児

⑧ 後見人

⑨ 調教師

9

Z

① 慣用句

② 同義語

③ 見立絵

④ 投影図

⑤ 彩色画

⑥ 顔写真

⑦ 案内板

⑧ 風物詩

⑨ 円舞曲

10

問3

空欄

I

IV

①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 11 に入るものの組み合わせとして最も適当なものを、次の

① I…せっかく

II…いいように

III…ずいぶんと

IV…あろうことか

② I…ずいぶんと

II…あろうことか

III…せっかく

IV…いいように

③ I…いいように

II…ずいぶんと

III…あろうことか

IV…せっかく

④ I…あろうことか

II…いいように

III…ずいぶんと

IV…せっかく

⑤ I…せっかく

II…ずいぶんと

III…あろうことか

IV…いいように

⑥ I…ずいぶんと

II…せっかく

III…いいように

IV…あろうことか

⑦ I…いいように

II…あろうことか

III…せっかく

IV…ずいぶんと

⑧ I…あろうことか

II…せっかく

III…いいように

IV…ずいぶんと

問4 空欄

ア

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから

一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 権威主義を助長
- ② 民族主義を確立
- ③ 啓蒙主義を紹介
- ④ 叙情主義を賞揚
- ⑤ 写実主義を徹底
- ⑥ 耽美主義を実践  
たんび
- ⑦ 国家主義を排除
- ⑧ 形式主義を拡大

問5

傍線部A「まさに『ちょうちょう』の原型となったわらべ唄の歌詞のとおりである」の説明

として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① わらべ唄の歌詞にあるとおりチョウは桜の花から菜の葉にとまること。
- ② わらべ唄の歌詞にあるとおりチョウは菜の葉から桜の葉にとまること。
- ③ わらべ唄の歌詞にあるとおりチョウは菜の葉から別の葉にとまること。
- ④ わらべ唄の歌詞のとおりチョウは菜の花を嫌って菜の葉にとまること。
- ⑤ わらべ唄の歌詞のとおりチョウは菜の葉を嫌って桜の葉にとまること。
- ⑥ わらべ唄の歌詞のとおりチョウは菜の葉から別の菜の葉にとまること。
- ⑦ チョウが飛び回る様子は野村秋足の歌詞の内容と全く同じであること。
- ⑧ 「ちょうちょう」の歌詞は尾張地方で見る菜の花畑の光景であること。

問6

傍線部B「そもいかなない理由」の説明として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから

一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 偏食がなければ親の苦勞を軽減できるとい理由
- ② 植物の葉をむさぼり食う昆虫は大敵だとい理由
- ③ 特定植物だけを食べれば食害を防げるとい理由
- ④ ほかの葉っぱさえ食べれば生存できるとい理由
- ⑤ 対象となる植物の防御策しか破れないとい理由
- ⑥ 植物の防御策を打ち破る万能策はないとい理由
- ⑦ 防御物質を作り出す方法に効果はないとい理由
- ⑧ 切っても切れない密接な間柄となったとい理由

問7 傍線部C「利用価値のある」の説明として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は **15**。

- ① シニグリンと呼ばれる物質が辛味の成分であること。
- ② アブラナ科植物の防御策を打ち破る能力があること。
- ③ カラシ油配糖体が防御効果を発揮して機能すること。
- ④ サクラの花で遊ぶ方が菜の花で遊ぶより楽しいこと。
- ⑤ 花粉を他の花まで運ばせて受粉の仲介をさせること。
- ⑥ 花粉を運ばず蜜を吸うだけの蜜どろぼうであること。
- ⑦ カラシ油配糖体に対する対策をうまく使われること。
- ⑧ 防御物質を作る能力が誘引の目印になっていること。

問8 傍線部D「そこが大変である」が指す内容として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから二つ選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答は、解答番号 **16** の二ヶ所にマークすること。

- ① 遠い距離から花を訪れるよう、遠くから認識しやすい赤系統の色で咲くこと。
- ② 大きなアゲハチョウに見合う大きな花びらをつけ、立派な花を咲かせること。
- ③ アゲハチョウを惹きつけるために、甘い大量の蜜と強い香りを用意すること。
- ④ おしべやめしべをこれでもかと突き出して、チョウに花粉をつけさせること。
- ⑤ ユリやツツジなどチョウに花粉を運ばせる花は、横向きや下向きに咲くこと。
- ⑥ 横向きや下向きに咲く花から蜜を吸うために、必死に羽をばたつかせること。
- ⑦ 花の蜜を吸おうとしているうち、知らず知らず体に花粉がついてしまうこと。
- ⑧ 長い足とストローのような長い口で蜜を吸うために、蜜どろぼうになること。

問9 傍線部E「秘密」の内容として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は **17**。

- ① モンシロチョウは「紋白」とは言うものの、白い色は紋ではなく羽の色であるということ。
- ② 紋が黒く羽が白いチョウなので、モンシロチョウの名は「紋黒白蝶」が正しいということ。
- ③ モンキチョウの羽も鱗粉を取ると、トンボやハチの羽と同じように透明になるということ。
- ④ モンシロチョウの美しい羽の鱗粉には、水をはじいて羽を保護する役割があるということ。
- ⑤ モンキチョウはモンシロチョウと羽の色が違うのに、シロチョウ科のチョウだということ。
- ⑥ 美しい鱗粉は、さなぎのときに外に排出できない老廃物を再利用して作られるということ。
- ⑦ モンシロチョウの羽色も完全な白色ではなく、裏側は少し黄色みがかっているということ。
- ⑧ モンキチョウやモンシロチョウの鮮やかな羽の黄色は、何とも春めいて見えるということ。



問10 空欄

甲

に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうち

から一つ選べ。解答番号は 18 。

- ① 受粉の攻防
- ② 菜の花の誤算
- ③ 防御物質の正体
- ④ 毒性物質の回避
- ⑤ 蜜どろぼうの放置
- ⑥ カラシ油配糖体の効用
- ⑦ アブラナ科植物の宿命
- ⑧ 長い足とストローの功罪

問11 本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答は、解答番号 **19** の二ヶ所にマークすること。

- ① 国文学者の野村秋足は尾張地方のわらべ唄をもとに「ちょうちょう」を作詞し、チョウが花から花へと菜の花を飛び回る様子を表現したが、戦後、日本の春のシンボルであるサクラを読み込んで、チョウが桜の花にまで飛んで行く様子に書き換えた。
- ② 昆虫に対する防御策として多くの植物は毒性物質を体内に用意しているため、モンシロチョウは足の先端でカラシ油配糖体を含んでいないアブラナ科の植物を探し出し、それらの葉っぱに次から次へと産卵して飛び回る行動を繰り返す。
- ③ アブラナ科植物の葉の裏にモンシロチョウが小さな卵を一カ所だけ産みつけるのは、産卵後の幼虫の数が多くなりすぎて餌の葉っぱが足りなくなること未然に防止するためのドラミングと呼ばれる自衛策である。
- ④ モンシロチョウはカラシ油配糖体への耐性を身につけているため、菜の葉にとって招かれざる客であるが、甘い蜜を与える代わりに花粉を運んでもらうという持ちつ持たれつ関係が期待されるので、モンシロチョウは菜の花にとっても招かれざる客といえる。
- ⑤ 葉をむさぼり食う大敵である昆虫に、植物は特殊な防御物質を作り出して対抗しようとするが、昆虫はその防御策を打ち破る方法をも身につけるため、植物はさらなる防御策を、昆虫はさらなる対抗策を身につけ、進化の中で密接な関係が形成された。
- ⑥ ユリやツツジなどの赤系統の花が大型のアゲハチョウの仲間をパートナーに選ぶのは、赤い色の光の波長特性によって赤系統の花が遠くからでも認識しやすいからであり、この特性が大量の花粉を遠くまで運ばせる主因となっている。
- ⑦ アブラナやキャベツの辛味の元になるのはカラシ油配糖体であり、私たちが好んで食べるアブラナ科野菜独特の辛味も、本来は昆虫に対する防御物質であるが、モンシロチョウの幼虫である青虫は、その防御物質を打ち破る術を身につけている。
- ⑧ 紋のある白い蝶という意味のモンシロチョウも、紋のある黄いろい蝶という意味のモンキチョウも、同じシロチョウ科のチョウに分類されており、幼虫の青虫はカラシ油配糖体への耐性を身につけているので、アブラナ科以外の植物は食べない。
- ⑨ 植物が美しい花びらで花を飾り、甘い蜜を用意して昆虫を呼び寄せるのは、呼び寄せた昆虫に受粉の手助けをさせるためであるが、ハチやアブなどの昆虫はチョウと違って花の中に潜り込んで蜜を吸うので、蜜を盗むだけの蜜どろぼうに過ぎない。

## 甲

政治や企業活動と地域社会の違いは、専従のリーダーがいらないことである。政治のプロフェッショナル、つまりは職業政治家、ならびに専従の経営者にあたるものが存在しない。地方議会の議員がそれにあたるはずであったのだが、町内会や婦人会、商店街の振興会や社会福祉協議会などといった、選挙での集票機能をもった既存の団体とのパイプを使うばかりで、都市部であらたに動きだしたNPOやボランティアといった新しい市民のネットワークにうまく対応もしくは連携がとれていない大方の地方議員は、残念ながら地域社会のジュウゼンな力になっているとはともいえない。地方議員のこの無力は、市民に力がついてきたからではなく、逆に、政治のプロ（であるはずのひとたち）への市民の「おまかせ」構造がますます昂<sup>こ</sup>じてきた結果なのである。

社会がいやでも縮小してゆく時代、「廃」炉とか「ダウン」サイジングなどが課題として立つてくるところでは、先頭で道を切り開いてゆくひとよりも、むしろ最後尾でみなを安否を確認しつつ進む登山グループの「しんがり」のような存在、退却戦で敵のいちばん近くにいて、味方の安全を確認してから最後に引き上げるような「しんがり」の判断が、もつとも重要になってくる。じつさい、震災復興にあっても、ひたすら「防災」のためのハード面での公共事業に取り組むのではなく、地域が震災前から抱え込んでいた問題を見据えながら、そこでの日々の暮らしを創造的に再興する取り組みと結びついた経済活性化策を講じなければならぬだろうし、またもしそうした社会全体への気遣いや目配りができていれば、建築資材と労賃のコウトウを招くことで東北での復興事業を大きく遅延させることが必定<sup>c</sup>な「東京五輪」の誘致など、だれも発想しなかっただろう。こういう全体の気遣いこそほんとうのプロフェッショナルが備えていなければならないものなのであり、またよきフォロワーシップの心得<sup>B</sup>というべきものである。そしてこうした心得を、ここで《しんがりの思想》と呼んでみたい。

リーダーがその「しんがり」の務めに戻るべきときがいま来ている。ダウンサイジングという、「右肩上がり」の時代のリーダーたちがいちばん不得手な難問が山積しているという状況が目の前にある。

「経世済民」(political economy)の「エコノミー」という語が、ギリシャ語の「オイコノミア」(家政)からきているように、<sup>C</sup>国家財政というのは家計とよく似ている。そもそもどの経費を削るか、どこを膨らましてどこを圧縮するか、何に <sup>I</sup> は金を向け、何を後に回すか……。思案のしどころである。国家財政においても家計においても。そしてこれはもつとも頭を使うところでもある。パイは決まっている。一人ひとりの願いを聞き届ければ、家計は破綻<sup>はたん</sup>する。借金は家訓によりゴハットだ。だからまず無駄を省くことを考える。けれどもそれにも限界がある。切り捨てを<sup>d</sup>決断しなければならぬものがあるのはあきらかだ。けれどもいきなり切り捨てを申し渡して、せつかくのやる気を殺ぐのは忍びない。後に回す、あるいは眼をつむって切り捨てるにも、きちんとした理由をあげて、相手を納得させねばならない。そこであげるべき理由は何か、もつべき「未<sup>e</sup>来像」は何か……。

ここにきて、財布を握る主婦ないしは主夫ははたと考え込む。優先順位を決めるにあたっての理

屈を考えなければならなくなるのだ。我慢を求めるためには、きちんとした説得の言葉が必要だ。相手に納得させるにはしっかりと「思想」が要る。「思想」という言葉が仰々しければ、「家族生活の基本となる考え方」と言ってもいい。あるいは価値の「ケイジュウ」と先後、つまりは「価値の遠近法」と言ってもいい。そして何かをしきりにねだっていた子どもも、こういうことも考えないといけないのだというふうに、事の複雑さを知るようになる。

かつてひとびとが極度に貧しいときには、<sup>E</sup>理屈は必要なかった。まずはいのちをつなぐこと、生き存えること、これが原点であることが明確であった。子どもが何かねだっても、「これがあつたら家族みんなが数日間、食べられますからね」と言われれば、子どもは黙るほかなかった。あるていどの融通が利くほどに豊かになると、子どもは「あの子は買ってもらったのに、それに較べうちの親は愛情が薄い」というふうに不満を溜め込むようになる。

「限界」を意識するのは、この意味で大事なことである。ここを超えると危険水域に入るという臨界点を知ること。これがいのちをつなぐためにもっとも重要なことだ。「限界」を見させまいとすることは、子どもの心を傷つけないという思いからのことだろうが、いずれ子どもをより大きな危機にさらすことになる。しかし、「限界」はよほど眼をこらさないと見えない。眼をこらすというのは、じぶんがどういう状況にあるかを一歩退いて見ること、つまりは ア だからだ。

日本人は栄養に強く、過栄養に弱いと、肝臓疾患の専門医から聞いたことがある。どういうことかというと、日本人の身体は体内に採り入れた少ない脂肪を数日間うまく使って飢えを凌ぐのには向いているが、栄養過多に対して脂肪を減らす機能がないということらしい。だからこのところ、肝脂肪が原因で肝臓ガンになるひとがじわりじわり増えているという。そういう意味でも、減らすというのはほんとうにむずかしい。ご馳走があるのに、途中でやめるといのはむずかしい。便利な物をあえて使わないというのもむずかしい。何かある事業を立ち上げるために別の事業をやめるというのもむずかしい。「足るを知る」。言葉はやさしいが、それを実行するのはむずかしい。このことがわたしたちの社会構造についてもいえるとするなら、「足るを知る」という古人の知恵、いかえるとダウンサイジングというメンタリテイに、いまだれよりも近いところにいるのが、どうか、そうならざるをえない場所へいちばん先にはじき出されたのが、いまの若い世代なのかもしれない。骨の髄まで「成長」幻想に染められているそれ以前の世代には、過栄養という不自然が不自然には映らないからである。ダウンサイジングというメンタリテイにもっとも遠い世代のリーダー像では、縮小してゆく社会には対応できないのだ。

## 乙

この国は本気で「退却戦」を考えなければならぬ時代に入りつつある。そのときリーダーの任に堪えるのは、もはや「引つ張ってゆく」タイプのリーダーではない。それは「右肩上がり」の時代にしか通用しないリーダー像だ。これに対して、ダウンサイジングの時代に求められるのは、いってみれば「しんがり」のマイインドである。

「しんがり」とはいうまでもなく、合戦で劣勢に立たされ退却を余儀なくされたときに、隊列の最後部を務める部隊のことである。彼らが担うのは、敵の追撃に遭って本隊を先に安全な場所まで

退却させるために、限られた軍勢で敵の追撃を阻止し、味方の犠牲を最小限に食い止める、きわめて危険な任務である。「しんがり」は「後駆」<sup>しりがり</sup>が音便化した語で、「後備え」<sup>あとそな</sup>「尻払い」<sup>しっぽらい</sup>「殿軍」<sup>でんぐん</sup>ともいわれる。現代には「ケツモチ」という言い回しもあるようで、いわゆるイベント・サークルでトラブルに陥ったときそれに片を付けてくれるひとのことらしいが、ヤンキー語では、暴走族が暴走行為をするときに最後尾を受けもつメンバーのことをさす。「パトカーに追跡されると速度を落とす」として蛇行運転し、前の集団を逃がすのが彼らの役目である」(斎藤環『世界が土曜の夜の夢なら——ヤンキーと精神分析』参照)。ちなみに「しんがり」を「殿」と書くのは、「殿」の屍(屍)がひとが几(牀几)に腰掛けている形で、「殿」が「天子の御所」や「政務を執る所」を意味する一方で、それが「臀」<sup>しり</sup>に通じるところから「尻」、さらには「しんがり」を意味するようになったからだといわれる(白川静『字通』参照)。

あるいは、登山のパーティで最後尾を務めるひと。経験と判断力と体力にもっとも秀でたひとがその任に就くという。一番手が「しんがり」を務める。二番手は先頭に立つ。そしてもっとも経験と体力に劣る者が先頭の真後ろにつき、先頭はそのひとの息づかいや気配を背中であつかいがいながら歩行のペースを決めるといふ。要は「しんがり」だけが隊列の全体を見ることが出来る。パーティの全員の後ろ姿を見ることが出来る。そして隊員がよろけたり脚を踏み外したりしたとき、間髪おらず救助にあたる。

じつさい右肩下がりの時代、「廃」<sup>F</sup>炬とかダウンサイジングなどが課題として立ってくるところでは、先頭で道を切り開いてゆくひとよりも、このように最後尾でみなを安否を確認しつつ進む登山隊の「しんがり」のような存在、仲間の安全を確認してから最後に引き上げる「しんがり」の判断が、もっとも重要になってくる。だれかに、あるいは特定の業界に、犠牲が集中していないか、リーダーは張り切りすぎでみなついてゆくの四苦八苦しているのではないか、そろそろどこかから悲鳴が上がらないか、このままではたしてもつか……といった全体のケア、各所への気遣いと、そこでの **II** な判断こそ、縮小してゆく社会において、リーダーが備えていなければならぬマインドなのである。

この文章を草しているさなかに読んだ『地方消滅の罍』<sup>わな</sup>(二〇一四年)のなかで、山下祐介もこのマインドを「敗戦の際の撤退軍のしんがり」のそれに喩えて、こう述べている——

軍を引きながらも、しっかりと踏みとどまるところは踏みとどまり、傷口を最低限に防ぎ、全体の潰走をおさえる——そこにはしっかりとした戦略が必要であり、引くだけでなく、守るべき場所やその意義が全軍で十分に共有されていなければならない。自分がそこにいる意味が分かってこそ、兵隊は苦しさに耐え、逃げずに踏みとどまるのである。でなければ、そこが撤退の場所だと分かったとたんに潰走の火種は次から次へと全軍に移り、堤防にケツカイが生じるように、すべては一気に崩れていくだろう。

が、政治家も企業人も、そしておそらくは市民の多くも、声の大きいひとたちは、そういうマインドではなく、相も変わらず逆ベクトルのリーダー(待望)論をがなり立てるばかりだ。

鷺田清一「しんがりの思想」(角川書店 2015年)

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a～f のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は  ～  。

a ジュウゼン

b コウトウ

c 必定

d ゴハット

e ケイジュウ

f ケツカイ

問2 空欄 I II に入る語として最も適当なものを、次の①～⑧のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は  ・  。

I

① 銀行

② 企業

③ 国王

④ 主君

II

① 屈強

② 緊密

③ 重篤

④ 独特

問3 空欄 ア に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は  。

① 自己理解に不可欠

② 自己観察の裏返し

③ 潰走に向けた準備

④ 心ならない退却戦

⑤ 逃走のための闘争

⑥ 危機を楽しむ余裕

⑦ 惰性を脱する行為

⑧ 限界に対する挑戦

⑨ 子どもを守る一歩

問4 傍線部A「地方議員のこの無力」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 29。

- ① 地方議会において専従の長を務める議長役がないため、地方政治が民意から離れたものになってしまっているということ。
- ② 地方議会において専従の長を務めるべきリーダー役の議長が無能であるため、地方の政治が無力化してしまっているということ。
- ③ 地方議会に、NPOやボランティアなどの市民ネットワークを支持団体としている議員がまったくいないため、地方議会でも何も決められなくなっているということ。
- ④ 地域社会を支えるべき地方議員が、NPOやボランティアなどの市民ネットワークよりも存在感が薄くなっているということ。
- ⑤ 地域社会における専従のリーダーとしての役割を地方議員が果たしていないため、地域社会全体に目配りした適切な政治が行われていないということ。
- ⑥ 地域社会にプロの政治家がないため、町内会や商店街の振興会などといった集票機能をもつ団体の意向が政治に反映されていないということ。

問5 傍線部B「こうした心得」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 30。

- ① 社会がいやでも縮小していく時代であるということを十分に認識し、先頭で道を切り開いていくのではなく、社会の諸問題の後始末に徹するという考えのこと。
- ② リーダーであるというプロフェッショナルとしての意識を高くもち、様々な問題を解決すべく率先して社会全体を引っ張っていくという態度のこと。
- ③ 弱者や現に困難にある者などに対して常に気遣い目配りをしつつ、自ら先頭に立って社会全体を引っ張っていくという姿勢のこと。
- ④ 前進することばかりを考えるのではなく、最後尾から全体を眺めるように社会全体の問題を常に意識しながら様々な配慮をしていくという心構えのこと。
- ⑤ 経済を成長させることを見据えながら震災復興など様々な経済活性化策を講じるべく、社会全体への目配りや気遣いを心掛けていくということ。
- ⑥ 地域が震災前から抱え込んでいた諸問題を見据えつつ、プロのリーダーとして社会全体を引っ張っていくこうとする気構えのこと。

問6 傍線部C「国家財政というのは家計とよく似ている」の説明として最も適当なものを、次の

①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

31

- ① 国家財政においては家計と同じように、どの経費を削減するかということを考えながら、何に対して優先的に予算を配分すべきかを熟考せねばならないということ。
- ② 国家財政においては家計と同じように、何に金を使うかということよりも経費を削減することの方を優先して考えねばならないということ。
- ③ 国家財政においては家計と同じように、パイは決まっているなかで一人ひとりの願いを聞き届けながらどの経費を削るか、何に金を使うか思案していかねばならないということ。
- ④ 国家財政においては家計と同じように、相手を納得させるべく経費を削る理由を常に考えながら一人ひとりの願いを聞き届ける努力を重ねていかねばならないということ。
- ⑤ 国家財政においては家計と同じように、破綻することがないように無駄を省くことを第一に考え、切り捨てるべき費目については有無を言わず削っていかねばならないということ。
- ⑥ 国家財政においては家計と同じように、適切な理由をあげて経費削減を行うのはむしろかしたため、経費の圧縮よりも何に予算を回すかについて優先的に考えるべきだということ。

問7 傍線部D「仰々し(い)」の意味として最も適当なものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。

解答番号は

32

- |          |          |          |
|----------|----------|----------|
| ① 敬意が過ぎる | ② 浅はかである | ③ きらびやかだ |
| ④ 事実に反する | ⑤ ゆがんでいる | ⑥ 大げさである |
| ⑦ 納得しがたい | ⑧ わかりにくい | ⑨ 重みに欠ける |



問8 傍線部E「理屈は必要なかった」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 極度に貧しいときには、生き存えることに精一杯になってしまったため、親と子どもの間で食べ物について話し合う余裕などはじめからなかったから。
- ② 極度に貧しいときには、子どもの不満を抑えるためにいのちをつなぐ必要があるという言葉が方便となったから。
- ③ 極度に貧しいときには、他家の子どもの状況を知るだけの余裕が子どもにもないため、親が子どもに自家の状況を説明する必要がなかったから。
- ④ 極度に貧しいときには、融通が利くほどに豊かではないことが子どもにもわかるため、子どもの方から自家の状況について説明を求めることがなかったから。
- ⑤ 極度に貧しいときには、貧しいことを子どもに説明する理由よりもいのちをつなぐための食料の確保の方が重要であったから。
- ⑥ 極度に貧しいときには、生存を維持するということが何よりも優先され、そのことは子どもにも自明であったから。

問9 傍線部F「一番手が『しんがり』を務める」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 登山においては最後尾でみなのお安否を確認しつつ進む任務が最重要であり、経験や判断力、体力の点でもっとも秀でた最年長者がその任に就くのがよいから。
- ② 登山においては一番後ろから全員の安否を確認する「しんがり」が重要であり、経験と判断力、体力にもっとも秀でた一番手が最後尾から二番手を見守る必要があるから。
- ③ 登山においては先頭に立って道を切り開いていくことが何よりも重要であり、経験と判断力と体力にもっとも秀でた一番手が最後尾から二番手を見守る必要があるから。
- ④ 登山においては先頭に立つことは重要ではなく、隊列の全体を見ることが重要であり、その任には経験・判断力・体力の点でもっとも優れた一番手が就くのが最善であるから。
- ⑤ 登山においては最後尾から仲間の安全を確認する役割が重要であり、その役割は経験、判断力、体力の点で最優秀の者が担うのがふさわしいから。
- ⑥ 登山においては体力に劣る者への配慮よりもパーティ全員の後ろ姿を見て援助に当たることの方が重要であり、その任に就くのに適しているのはもっとも優等な一番手であるから。

問10 傍線部G「逆ベクトルのリーダー（待望）論」の説明として最も適当なものを、次の①～

⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

35

- ① リーダーは今は右肩下がりの時代であるとの認識に立ち、自らみなを引っ張っていくべきだとする考え方や、そのようなリーダーの登場を待ち望む考え方。
- ② リーダーは世間の声に流されてはならず、世間が望むのとは逆の方向に社会を引っ張っていくべきだとする考え方や、そのようなリーダーの出現を待望する考え方。
- ③ リーダーはダウンサイジングというメンタリテイに則って社会を発展させるべく、みなを導いていくべきだとする考え方や、そのようなリーダーの登場を望む考え方。
- ④ リーダーは自ら先頭に立って道を切り開き、みなを引っ張っていくべきだとする考え方や、そのようなリーダーが現れることを期待する考え方。
- ⑤ リーダーは縮小している社会にふさわしい存在でなければならず、逆向きに社会を牽引するべきだという考え方や、そのようなリーダーを待ち望む考え方。
- ⑥ リーダーは現在を右肩上がりの時代に変えていくべく、社会全体への気遣いや目配りを行うべきだとする考え方や、そのようなリーダーの登場を期する考え方。

問11 空欄 甲 乙 に入る小見出しの組み合わせとして

最も適当なものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は

36

- ① 甲―地域社会の停滞 乙―「しんがり」の重要性
- ② 甲―「しんがり」という考え方 乙―「しんがり」の潰走
- ③ 甲―ダウンサイジングというメンタリテイ 乙―語源から学ぶ「しんがり」
- ④ 甲―「経世済民」の在り方 乙―「しんがり」のマイナド
- ⑤ 甲―「しんがり」の存在 乙―「しんがり」の語源とは
- ⑥ 甲―リーダー不在の時代 乙―待望される「しんがり」のリーダー
- ⑦ 甲―「限界」を超える 乙―「しんがり」とは何か
- ⑧ 甲―「しんがり」の思想 乙―「しんがり」の務め
- ⑨ 甲―プロフェッショナルの心得 乙―プロフェッショナルの退却

問12

本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ、選べ。ただし、二つとも正解しなければ点を与えない。解答は、解答番号 37 の二ヶ所にマークすること。

- ① ヤンキー語における「ケツモチ」とは、暴走族が暴走行為をするときに最後尾を受けもつメンバーのことをさす言葉であり、パトカーに追跡されると速度を落として自ら捕まることにより前の集団を逃がすという役割を担っている。
- ② 肝臓疾患の専門医によれば、日本人の身体は体内に採り入れた少ない脂肪を数日間うまく使って飢えを凌ぐのには向いているが、栄養過多に対して脂肪を排出する機能がないため、このところ肝脂肪が原因で肝臓ガンになるひとがじわりじわり増えているという。
- ③ 右肩下りの時代にあつては、先頭で道を切り開いていくひとよりも全体のケア、各所への気遣いを行える「しんがり」のマインドが求められるが、『地方消滅の罨』のなかで述べられている通り、そのようなマインドが日本から失われて久しい。
- ④ 白川静『字通』の説明によれば「しんがり」は「後駆<sup>しんがり</sup>」が音便化した語であり、これを「殿」と書くのは、「殿」が「天子の御所」や「政務を執る所」を意味する一方でそれが「臀」に通じるところから「尻」さらには「しんがり」を意味するようになったためである。
- ⑤ 日本は本気で「退却戦」を考えねばならない戦時に入りつつあり、もはや引張つてゆくタイプのリーダーではリーダーの任に堪えられないが、ダウンサイジングの時代におけるリーダーに求められるのは「しんがり」のマインドである。
- ⑥ ご馳走を食べるのを途中でやめることや便利な物を使わないようにするのがむずかしいように「足るを知る」ということを実行するのはむずかしいが、ダウンサイジングというメンタリテイにもっとも遠い世代のリーダー像では、縮小していく社会には対応できない。
- ⑦ 震災復興において「防災」のためのハード面での公共事業が中心になり、加えて東北での復興事業を大きく遅延させることが必定な「東京五輪」の誘致話が出てしまったのも、社会全体への気遣いや目配りが日本のリーダーたちに欠落していたためといえよう。
- ⑧ 家計の財布を握る主婦や主夫には家族一人ひとりの願いに対して我慢を求めるために相手を説得するうえで「家族生活の基本となる考え方」あるいは「価値の遠近法」が要るが、ここでは右肩下りの時代に対応したダウンサイジングというメンタリテイが必要になる。
- ⑨ 町内会や婦人会、商店街の振興会や社会福祉協議会などといった、選挙での集票機能をもった既存の団体とのパイプを使うばかりとなり、地方議員が地域社会の力になりきれないのは、政治や企業活動と同じく専従のリーダーが地域社会には存在しないためである。